

第6回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「憎しみのカラス」

山口県 県立防府高等学校 3年 横田仁美



賢治のまちから
高校生★童話大賞

優秀賞／銀の星賞

山口県 県立防府高等学校三年 横田 仁美

『憎しみのカラス』

カラスに、襲われていた。

私がではない。確か同じクラスの、何さんだったか、そう、下郷さん。友達と言うほど仲良くは無いが、教科書を忘れたときに見せてくれと言えるくらいの関係。

「いっらーい！」

私はなるべく大きな声を出しながら、持っていた鞆かばんを大げさに振り回し、カラスに向かっていった。カラスはすぐに下郷さんから離れた。間合いを取って私を見ていたが、くると振り向いて飛んでいってしまった。あっけなかった。きつと襲われると思ったから。

下郷さんは倒れていた。

「大丈夫？」

駆け寄って声をかけると、すぐに目を開けてくれた。

「木下さん」

私の名前だ。私は頷うなずいた。

「カラスに襲われてたの。大丈夫？ 突っつかれたりとかしてない？」

下郷さんはぼんやりと、遠くを眺めるような表情でしばらく考えていて、「大丈夫」

と、答えた。

一人で立てると言われたので、手は貸さなかった。その表情は少し心配だったけど、けがらしいけがは見当たらないし、本人が大丈夫と言うのだ。「気をつけてね。何なら送っていいこうか？」



私の申し出に、下郷さんはやんわりと首を振った。

「大丈夫」

そして、笑った。

「今、とてもすっきりした気分なの」

不吉な笑顔だった。

次の日、学校帰り。

電線にカラスが止まっているのを見た。

昨日のカラスだった。

「おい、お前」

私は呼びかけた。

「昨日はよくも私のクラスメイトを襲ってくれたな」

カラスは首をぐるんと動かして、私の方を向いた。くちばしが開く。

『襲ったんじゃないよ』

…。

弁解しやがった。

「じゃあ何してたのよ」

今度は、カラスの方が黙った。驚いているようだ。あくまで想像だが。カラスの表情が読めるようなスキルは無いので。創造を続けると、普段しゃべるはずの無いカラスがしゃべったことによる驚きのための精神ダメージを狙ったのに、ほとんど見受けられなかったための驚き。ややこしい。

『お前変な奴だな』

「あんたほどじゃないわ」

だからかもしれない。目の前にいるカラスは、変だった。昨日のカラスだと見ただけで分かるくらい、他のカラスと浮いていた。だから、人語を話すくらいのことやってのけても、あまり不自然だと思わなかったのかも

しれない。

『まあいいや、変な奴』

「変な奴と呼ばれるのは気に食わない。私は木下あずさ」

『じゃあ、あずさ。俺様は聖』

「スカした名前ね」

聖は私の嫌味を無視して続ける。

『俺様が何してたって聞いてたよな』

「人を襲ってたんじゃないの」

『違うね』

聖は首を上げてくちばしを二回鳴らした。人間でいう、人指し指を立てて左右に振る動作のような感じ。あの、チツチツっていう。

……バカにされた感。

「じゃあ何なの」

『聞いて驚け』

カツと鳴いた。人間でいう、鼻で笑うような感じ。

やっぱり、バカにされている。

『俺様は、人間の憎しみを食っていたのだ』

素直に驚いた。

「なんで憎しみ？ カラスってなんかもっと違うもの食べるんじゃないの？」

『そこが俺様の凄いところさ』

わけわかんない。

『憎しみはな、少量でお腹いっぱいになり、しかもそれだけで長時間活動できると言う理想の食料なのだ！』

「なんかまずそうだけど」

『確かに味はよくない。けどな、今のご時世俺たちも大変でな。こういった

食料が望まれているのさ』

確かに、ニユースや教養番組で、カラスのことをよく聞くようになったと思う。

「でもさ、憎しみなんか、食べられるの？ そんなこと、できるもんなの？」

『それを俺様が発見したのさ』

聖は胸を張った、んだと思う。

「それはあんたが化け物だからなんじゃなくて？」

『失敬な！ 俺様はしゃべれるだけの普通のカラスだ！』

なんだかな……。言いたいことはあるが止めておこう。意味無い気がする。

「じゃあ、他のカラスも食べてるの？」

聖は首を振った。

『今は俺様の独占期間だ。しばらくしたらみんなにも教えてやるよ』

なるほど。話は分かった。つまり、聖は昨日下郷さんを襲っていたのではなく、下郷さんの憎しみを食べていたのだ。

憎しみ。憎しみねえ……。

「ま、いいや」

私は話を切り上げることにした。

「直接害のありそうな話じゃないし」

『分かってくれたらいいのだ』

偉そうだな。

「ああ、でも、人前で食事するのはやめたほうがいいよ。また誤解される」

『そうだな。ご忠告ありがとう』

聖は羽根を広げた。カラス流の感謝の仕方だろうか。ああ、聖流か。

私は手を振った。人間流の、さよなら。

「じゃあね」

『あ、ちょっと待った』

危うくこけそうになった。

「何」

『忠告のお礼。教えてたほうがいいかもしれないと思って』

「だから何」

聖は言葉を止めた。もったいぶるような感じ。いや、違う。言っていないのか悪いのか迷っている感じだ。

「気になるじゃん。言つてよ」

『じゃ、遠慮なく』

ほんとに遠慮がなかった。

『昨日の彼女の憎しみ、あずさ向けだったから』

家に帰って考えてみたが、心当たりが全く無い。聖が嘘うそをついていたことも考えられるけど、そんな風でも無かったような。

「大したことじゃないのかな」

自分でも気づかないうちに他人を傷つけているというのはよくある話。私にとってささいなことが、下郷さんにとって大事だったと言うことなのだろうか。

まあいい。

どちらにしても、下郷さんの憎しみは、聖が食べてしまったのだ。

これから気をつけよう。

学校に着いて、教室に入って、昨日の聖の言葉がやはり気になっていたので、下郷さんに目を向けた。

下郷さんは友達と談笑していた。

誰かを憎んでるとか、そんな物騒な様子は見受けられない。

私はほっとして席に着いた。

顔を上げると、話を止めて席に着こうとしている下郷さんと目が合った。

「おはよう」

私は微笑^{ほほえ}みながら言った。

返事が無かった。

「どうしたの？」

下郷さんは、私を見て、固まっていた。

「下郷さん？」

私は立ち上がる。様子が変だ。

下郷さんの目が、ゆっくりと見開かれ、そして。

前触れもなく、倒れこんだ。

大きな音がして、椅子が巻き込まれる。

私は下郷さんに駆け寄った。

「大丈夫？」

どっかで見たことのある状況。

でも、まさか。

「下郷さん！」

叫んでいるような私の声に、下郷さんは目を開けた。だるそうに頭を上げ、私を見る。

「木下さん？」

私は頷く。

「大丈夫？ 頭とかうってない？」

かわりばえしない私の言葉に、下郷さんも同じように答えた。

「大丈夫」

そして、同じように笑った。

「なんかすごく、すっきりした気分」

窓の外で、何かが飛び立つ音がした。

視界の端に、黒い魂が映った。

私には分かる。

あれは。

聖は、昨日と同じ場所にいた。

『あの女しつこいなー。あずさ、ずいぶんひどいことしたんだな』

「してないわよ。心当たりもないわよ」

『どうだかね』

聖は今日も偉そうだった。

「ねえ、聖」

私は尋ねた。

「まだ一人、ていうか一匹で食べてるの？」

『そうだけど、何だ？』

聖は首を傾げる。

『もしかして、独り占めは止めろってか？ 安心しろ、そろそろ広める算段

はつけてる』

「そうじゃなくて」

とは言ったが、私も何を言いたいのかよく分からない。漠然とした、不安。

こんな不安だけで、聖を止める理由になるのだろうか。

でも、このままだと、取り返しをつかないような気がする。

「聖」

言い出そうとして、聖の姿が消えていることに気が付く。

遠い空に、黒い影が見えた。

憎しみは、食べられるものなのだろうか。

人間は毒キノコを食べることができるとは。けれど、食べたなら死ぬのだ。
聖も、同じなんじゃないだろうか。

次の日の学校でも、下郷さんは私を見つければ私を見て、私に、向かってきて、途中で倒れた。窓の外にはまた聖。下郷さんはまた、笑っていた。

帰り道に聖に会うことは無かった。

どこへいつてしまうのだろうか。

そう思って、机に着いていた夜。

窓を叩く音がした。

近づいてみると、黒い大きな塊が、窓を覆っていた。

「ひっ」

小さな声をあげて、後ずさる。

『俺様だよ。入れてくれよ、あずさ』

聞こえてきたのは、聖の声だった。

窓を開け放つと、普通のカラスの十倍ぐらいの大きさの黒い鳥が、転がり込んできた。

「聖、なの？」

おそろおそろ尋ねると、頷いた。

「やっぱり化け物だったんじゃない」

『失礼な。俺様はしゃべれるだけの普通のカラスだって言っただろ』

確かに聖だ。

「どうしたの」

聖の、大きくなった頭の横に座って、尋ねた。聖は苦しそうに答える。

『すっごく、お腹が痛い。なんか、変なものが、ぐるぐる回ってるんだ』

「憎しみなんか食べるからだよ」

私は言って、聖の背中をさすってやった。聖は気持ちよさそうに、目を細めた。

『いい考えだと思ったんだけどな』

「憎しみを食くべること？」

聖は頷うなずいた。

『ちよつとまずいけど、燃費がよくて、簡単に食べられて。あわよくば』

「あわよくば？」

聖は、言いにくそうに顔をそむけた。

『人間にありがたがられたいなって』

言葉も無い。

『そうすれば、カラスの地位向上かなって』

「そういうくだらないこと考えるのは、人間だけでいいのよ』

『くだらないかな』

私が頷くと、聖はがっかりしたように肩を落とした。

「それにね』

聖の頭が、こちらを向く。

「ちよつと考えたんだけど、憎しみって、決してなくならないと思うのね』

『どうして』

「人間に必要な感情だから』

『え』

意外そうだった。

「自分、が、よりよく生きていくのに、憎いっていう感情は、必要なんだと思うの』

『そうかな』

「断言はできないけど』

私は少し笑った。

「だけど、扱いにくい感情だから、人は憎しみに人を傷つけたり、争いを起こしたりしてしまう」

『じゃあ』

私は首を振る。

「でも、だからと言って外から何かされたんじゃないだめなの。だからこそ、自分から何とかしないとイケないと思うの」

下郷さんの憎しみだって、初めは、もしかしたら、自分で何とかできるくらいの小さなものだったかもしれない。だけど、聖に食べられることによって、よく分からなくなったんだと思う。よく分からないけど、憎い。憎いという感情だけが、大きくなって。どうしようもなくなって。

「憎しみを消すことは、自分にしかできないのよ」

聖が、小さくため息をついた。

『俺、どうしよう』

「普通のカラスに戻ったら？ あんた、頭よさそうだから、生活困らないんじゃない？」

『そうだね』

肯定されると少し悔しい。

『それが、いいかもね』

聖の声は弱弱しかった。

「疲れてる？」

『少し』

聖はゆっくりと目を閉じた私の腕の中で普通のカラスの三倍くらいにまで小さくなっている。

私も眠くなってきた。

目が覚めると、聖はいなくなっていた。



開け放たれた窓から、涼しい風が入ってくる。あのまま寝てしまったよ
うだ。

私は大きく伸びをした。

学校へ行こう。

自分になんともできなくなった憎しみ。多分止められるのは、憎まれて
いた、私だけ。

下郷さんは今日も、思ったとおり私に向かってきた。私は大きく息を吸
って、下郷さんに向き直った。

「ごめんね」

下郷さんの動きが止まった。

「ごめんね」

繰り返す。

下郷さんは、ゆっくりと膝をついた。

聖ではない。

下郷さんは、泣いていた。

「なんでもない。なんでもないの」

そう、つぶやきながら。

窓の外に、カラスが一只。

私をじっと見据えている。

聖は、普通のカラスに戻れたかしら。

飛び立ったカラスが、聖だったかどうか、わたしにはもう、分からなか
った。